

平成9年度

登校拒否（不登校）児に対する グループアプローチに関する研究

— 小集団構成員相互の交流による変容過程に着目して —

川崎市総合教育センター 教育相談研究会議

登校拒否（不登校）児に対するグループアプローチに関する研究

— 小集団構成員相互の交流による変容過程に着目して —

教育相談研究会議

小島 由枝¹
鈴木 眞一⁵

富増 孝之²

平賀のぞみ³

星野 和生⁴

要 約

川崎市総合教育センターの教育相談の件数は、年々増加の傾向を見せている。その中でも、登校拒否（不登校）に関する相談は、教育相談センターの相談件数全体の60%以上を占めるに至っている。登校拒否（不登校）は、「どの子にも起こりうる」問題であり、原因も「学校・家庭・社会のさまざまな要因が複雑に絡み合っている」と考えられる。

この登校拒否（不登校）児やその保護者に対する川崎市総合教育センターの教育相談の基本は個人相談が中心である。そして、これに加え、昭和61年度よりグループアプローチを試みてきている。これは、個人相談によってある程度心的エネルギーが高まってきたが、学校や社会の現実場面への適応には、まだ無理がある子どもたちに集団的アプローチを試みることにより、より一層適応を早めていくことができるのではないかと考え、始められたものである。

本研究では、グループアプローチを行うなかで、グループアプローチ担当者が個人相談担当のカウンセラーとの連携を深め、子どもたちの対人関係における不安や緊張を少しでも解消させ、安心して自分を出せる場作りを心掛けた。そして、その中で子どもたちと担当者の相互交流による両者の変容を探っていった。

キーワード：教育相談、登校拒否、不登校、グループアプローチ、小集団活動、人間関係

目 次

I 主題設定の理由	130	3. 参加した子どもたちの様子について	135
1. 研究の意義	130	4. 担当者的変容について	141
2. 研究の方法	131	担当者的変容	142
3. グループアプローチの計画	131	III 研究の成果と今後の課題	143
登校拒否（不登校）の相談過程と		1. 研究の成果	143
グループアプローチの位置	132	2. 今後の課題	143
II 研究の内容	133	おわりに	143
1. 活動の実際	133	参考文献	143
2. 個人相談とグループ		指導助言者	143
アプローチの関係について	134	グループアプローチ参加状況	144

¹川崎市立渡田小学校教諭（主任研修員）

²川崎市立稲田中学校教諭（研修員）

³川崎市立西中原中学校教諭（研修員）

⁴川崎市立上作延小学校教諭（研修員）

⁵川崎市総合教育センター研修指導主事

I. 主題設定の理由

このほど文部省がまとめた1996年度の学校基本調査によると、さまざまな理由から年間30日以上学校を休んだ小中学生が5年連続で増え、96年度は約94200人にもものぼったとのことである。

川崎市でも、30日以上欠席した小学生は954人、中学生は1310人で、そのうち「登校拒否の傾向」が理由となっている小学生は215人、中学生は898人であった。

この登校拒否（不登校）児やその保護者に対する当センターの教育相談の基本は、個人相談が中心であるが、これに加え、昭和61年度よりグループアプローチを下記のような独自の取り組み方で行っている。

- ・市内の小中学校の教員がグループアプローチの担当者になり、活動を進める。
 - ・グループアプローチの活動の中で得た経験を学校の子どもたちとのかかわりの中で生かしていく。
- こうした取り組み方で11年目を迎え、活動が続けられている。

（注）この取り組みは、川崎市立総合教育センターで実施されている。

1. 研究の意義

真仁田昭は「登校拒否児に対する治療の構造的展開」で、『幼児期よりさまざまな問題をかかえて中高年生など、いわゆる思春期あるいは青年期に入って登校拒否する子ども、あるいは、幼稚園・小学校から断続的、あるいは慢性的に登校拒否を続けている子どもなどは、単なる親や子どもに対するカウンセリングだけではいたずらに治療が長引くばかりか、その効果も十分な期待が持てない場合が多い。』¹⁾と指摘している。

また、登校拒否児に対するグループセラピーの意義について、平尾美生子は、次のように述べている。

- ・登校拒否児は、集団療法に参加すると相似体験を持つメンバーの中で自分だけが悩んでいるのではないという安心感が生まれ、余計な焦燥感や劣等感が解消される。
- ・治療者だけでなく、他のメンバーにも十分理解されることによって人に対する信頼感を増し、友人や仲間作りの体験を持つことができる。
- ・自分が他のメンバーに役立つという経験を持つことにより、自信がついてくるし、また積極的に他人と関わりを持つ姿勢が作られる。
- ・他のメンバーから、いろいろな指摘をされたり多様な刺激を受けることにより、自分自身の考え方や対人関

係の持ち方が明確化され、態度や行動の変化に導かれる契機となる。

- ・メンバーに見られる相互助言や情報交換は、具体的であり現実的なものであるため、各メンバーにとってそれらは受け入れやすく、また役立つ場合が多い。
- ・治療者もメンバーの一員として接することによって、大人や権威に対する抵抗が薄らいでいき、教師や親との関係を改善するのに役立つ場合もある。
- ・個人療法において、治療者への依存欲求が強くていつまでも分離が不可能な場合、集団療法の経験は他のメンバーとの関係意識を形成し、それが自分自身で物事を考え、行動していくという状況を作りだしていくことになる。
- ・集団療法は、個人療法による治療の仕上げという意味を持ち、家庭から学校集団や社会生活に飛び込んでいく橋渡しの機能を持つ。まず、気楽な少人数の集団から馴れていき、そこでの対人関係の学習や適応の経験を積むことによって人間関係の障害を克服し、現実場面への望ましい適応が実現されていくことになる。すなわち、集団療法は、個人療法の場面と現実生活場面の中間的な段階ともなりうるものと考えられる。²⁾

さらに、10年間のグループアプローチの研究報告の中から、その成果をあげてみると、以下のようなになる。

- ・緊張感や自己防衛が強いため、なかなか人との関わりが持てない子どもたちが、同じ悩みを持つ仲間集団との交流によって、自分だけではなかったという安心感が生まれ、劣等感や焦燥感が徐々に解消し、情緒的に安定していく様子が見られるようになった。
- ・同じような悩みを持つ仲間との関わりを続けていくうちに（略）その瞬間、瞬間に自分が感じたことを率直に言葉で表すことができるようになってきた。
（略）子どもたちは、徐々に心を開き、自信を回復してきているのだと思う。
- ・メンバーが鏡となって自己を客観視できるようになり現実を直視できるようになって自己理解が深まる。
- ・メンバーへの思いやりや協調性・耐性等が育ち、彼らへの興味・関心が広がる。
- ・友人関係を体験することにより（略）対人関係の学習ができる。
- ・リーダー体験を通して、自信が持てるようになる。
- ・自分の将来について考えるようになり、行動に移していく。³⁾

¹⁾ 真仁田昭「登校拒否児に対する治療の構造的展開」筑波大学学校教育研究部教育相談研究分野教育相談研究第19集 1981年 1P ²⁾ 平尾美生子「登校拒否児のグループセラピー」小泉英二編著「登校拒否—その心理と治療—」学報社 1988年 154-158P ³⁾ 「登校拒否児に対するグループアプローチ」川崎市総合教育センター研究要 1988年 1989年 1992年 1994年 1996年

以上のような集団療法の意義と必要性にもとづき、本研究会議でも、

個人相談によりある程度心的なエネルギーが高まってきたが、学校や社会という現実場面への適応にはまだ無理がある子どもに集団的なアプローチを試みることによって、さらにエネルギー回復が進み、現実場面への適応を早めていける。

と考へ、本主題

登校拒否（不登校）児に対するグループアプローチに関する研究
～小集団構成員相互の交流による
変容過程に着目して～

を設定した。

2. 研究の方法

上記の研究の主題に基づき、次のように研究を進めることにした。

- 従来の実践報告（記録）・文献等から、登校拒否児に対するグループアプローチの意義を学ぶ。
- カウンセラーより紹介された一人一人の子どもの状態を考察し、グループアプローチの計画をたてる。
- 活動中の一人一人の行動の様子や表情・言葉などを記録し、個人の変容を探る資料とする。さらに、集団が作られていく過程やその中での対人関係の変化についても記録していく。
- 活動後の子どもの気持ちや心の動きを感想や担当者の振り返りによってとらえる。
- 担当者の内面やかかわりの変化について、振り返りをし、記録していく。
- 個人相談のカウンセラーと協力体制を進める。

3. グループアプローチの計画

(1) 参加対象者

当センターの相談室に通っている小・中学生で、個人相談を通して次の様子が見られる子。

- ・グループアプローチに参加する意欲がある。
- ・他人との関わりを嫌がらない。

(2) 目標

- ・相談担当のカウンセラーから参加者個々についての情報を得て、一人一人の状態をとらえる。
- ・一人一人の状態をふまえ、グループアプローチでの具

体的活動内容・目標を決定する。

(3) 活動計画

①期間及び時間

- ・1年間の活動を3期に分ける。
(4～7月 9～12月 1～3月)
- ・毎週金曜日
- ・午後1時30分～4時

②グループの形態

- ・小・中学生を対象とする。
- ・オープングループとする。
- ・参加人数については、特に規定しない。

③活動場所

- ・原則として固定する。
しかし、活動内容によっては変更する場合もある

④活動内容

- ・参加することが容易で、人との関わりが求められるもの。
(例：ゲーム 工作 調理実習 スポーツ等)
- ・参加者の状態に照らし合わせて活動でねらうものを吟味し、担当者が基本的な計画を提示し細かい内容については参加者の意向によって計画し、実施する。
- ・参加者の状態によっては活動の内容を自分たちで考えさせていく。

⑤活動の留意点

- ・明るく自由でのびのびと活動できる雰囲気を作る。
- ・参加者同士がお互いにかかわり合えるような活動をこころがける。

⑥担当者

- ・主任研修員（1名）・研修員（3名）

⑦振り返り

- ・子どもたちが記入した振り返り用紙、担当者の振り返り用紙、活動の中で気づいたこと・感じたこと等を基に、
 - 子どもの変化
(表情・態度・行動・言葉・仕種等)
 - 子どもたちの集団の変化
 - 子どもたちの対人関係の変化
 - 担当者の内面の変化
 - 担当者の関わりの変化
 - グループ（子どもたち・担当者）の変化等について、振り返りを行う。
- ・振り返ったことを基に、次のかかわりを考える
- ・活動の記録として、写真撮影・ビデオ撮影をする
(お楽しみ会でメンバーで鑑賞し合う。)

登校拒否（不登校）の相談過程と グループアプローチの位置

〔保護者〕

〔本人〕

初期の状態像

初期の状態像

- 心理的不安定
- ・焦り いらだち 困惑
 - ・将来への不安
 - ・世間に対する気兼ね 負い目
 - ・登校への様々な試み
 - ・救いを求める思い

- 情緒不安・混乱
- ・心理的緊張
 - ・不安 焦り 葛藤
 - ・自責の念 劣等感 罪悪感
 - ・親への依存 反発

緊張関係



個人相談
(カウンセリング)

個人相談
(カウンセリング・遊戯療法等)

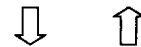
受容され共感的に理解される体験

- ・カタルシスにより気持ちが楽になり心のゆとりを取り戻す。
- ・自分の子どもに対する見方・感情・関わり方等を見つめるようになる。
- ・子どもの気持ちが分かるようになる。
- ・子どもとの関係が改善されていく。

受容され共感的に理解される体験

- ・気持ちが楽になり、情緒が安定していく。
- ・あるがままの自分が受け止めてもらえる。
- ・自尊感情を取り戻す。(肯定的な自己像)
- ・あるがままの自分を出せるようになる。
- ・自己を見つめることができるようになる。
- ・自己肯定の力がついてくる。
- ・何かやってみようという動きが出てくる。

安定した関係



グループアプローチ

仲間とかかわり合う関係

- ・他の仲間から理解さ、受け入れられる事によって、人に対する信頼感を取り戻す。
- ・グループの中で、あるがままの自分を出せるようになる。
- ・人との関わりに自信が持てるようになる。
- ・積極的に他人との関わりを持つ姿勢が作られる。

適応指導教室

相談指導学級

保護者会



現実場面 (学校・社会) への適応

Ⅱ 研究の内容

1. 活動の実際

グループアプローチは平成8年5月31日に第1回がスタートし、平成10年3月13日までに合計64回活動してきた。

(1) 平成8年度

活動時期	I 其月 (平成8年5月～9月)	II 其月 (平成8年10月～12月)	III 其月 (平成9年1月～3月)
グループ編成	男子3名 (中3-1名 中2-2名)	男子3名 (中3-1名 中2-2名) 女子2名 (中3-1名 中1-1名)	男子4名 (中3-1名 中2-3名) 女子2名 (中3-1名 中1-1名)
活動場所	当センター 作業能力検査室	塚越相談室 ふれあい広場	塚越相談室 ふれあい広場
活動時間	毎週金曜日 午後1時30分～4時	毎週金曜日午後2時～4時 (午後1時30分～2時 リラックスタイム)	毎週金曜日午後2時～4時 (午後1時30分～2時 リラックスタイム)
活動回数	9回	11回	9回
主な活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム(トランプ ウノ) ・工作(プロパン モーターカー ペットボトルロケット) ・お楽しみ会(ボーリング ビリヤード) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム(トランプ ウノ) ・調理実習(クレープ ホットケーキ ポップコーン 亀甲あめ) ・工作(すごろく) ・お楽しみ会(デコレーションケーキ作り バスケットボールなど) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム(トランプ ウノ) ・調理実習(お好み焼き) ・スポーツ(バドミントン 卓球) ・お別れ会(餃子作り)

(2) 平成9年度

活動時期	I 其月 (平成9年4月～7月)	II 其月 (平成9年9月～12月)	III 其月 (平成10年1月～3月)
グループ編成	男子2名 (中3-1名 小6-1名) 女子1名 (中2-1名)	男子2名 (中3-1名 小6-1名)	男子2名 (中3-1名 小6-1名) 女子2名 (小4-2名)
活動場所	塚越相談室 ふれあい広場	塚越相談室 ふれあい広場	塚越相談室 ふれあい広場
活動時間	毎週金曜日 午後2時～4時 (午後1時30分～2時 リラックスタイム)	毎週金曜日 午後2時～4時 (午後1時30分～2時 リラックスタイム)	毎週金曜日 午後2時～4時 (午後1時30分～2時 リラックスタイム)
活動回数	13回	12回	10回

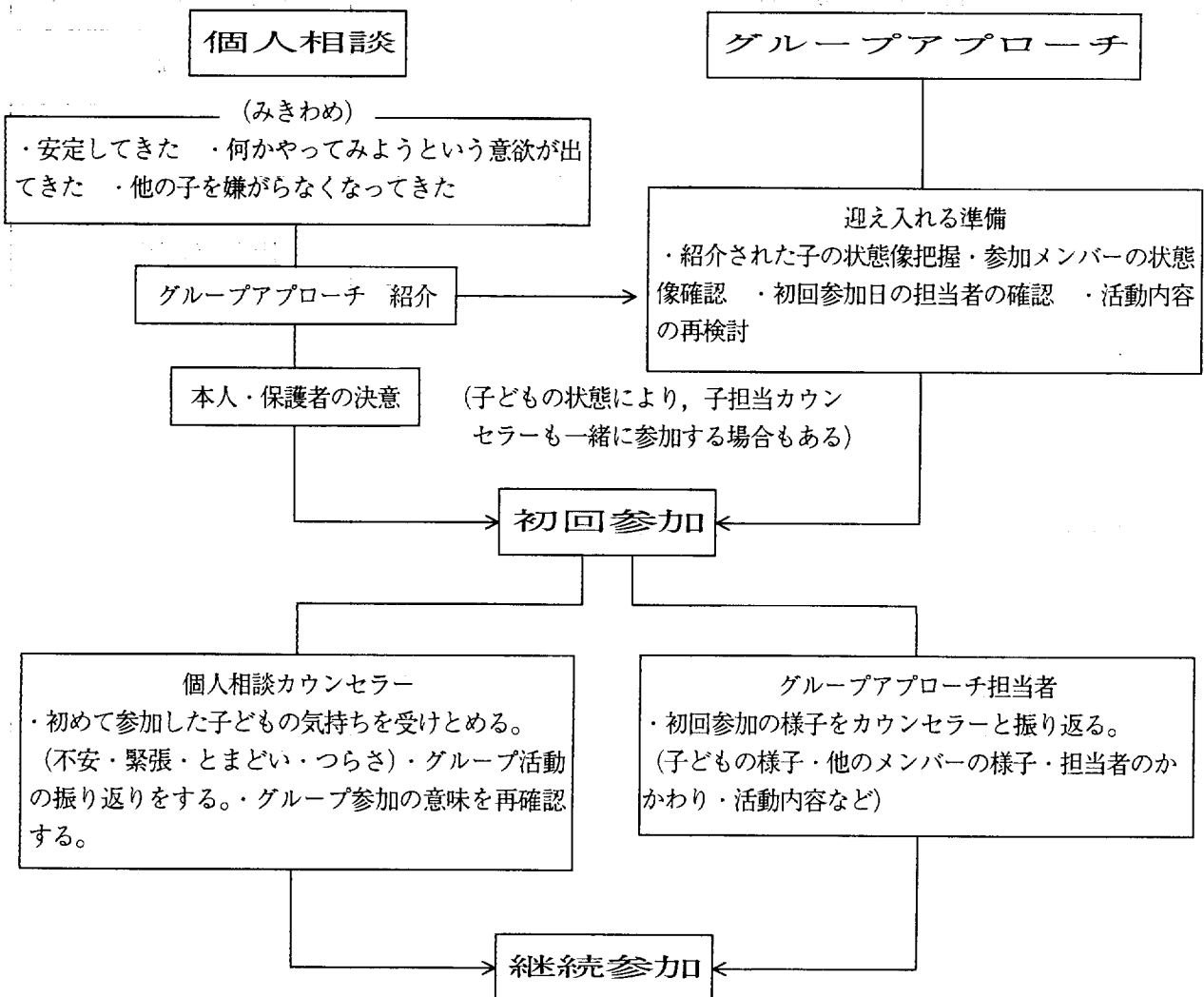
主な活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム (トランプ ウノ 花札) ・工作(シール作り) ・スポーツ(バドミントン ビリヤード 卓球) ・ビデオ撮影・鑑賞 ・お楽しみ会(ボーリング) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム (トランプ ウノ) ・調理実習(クレープ ホットケーキ お好み焼き じゃがいも焼き 餃子) ・スポーツ(バドミントン ビリヤード 卓球) ・お楽しみ会(デコレーションケーキ作り 卓球) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム (トランプ ウノ) ・スポーツ(バドミントン ビリヤード 卓球) ・調理実習(お好み焼き・タコ焼き) ・お別れ会(ボーリング)
--------	---	--	---

2. 個人相談とグループアプローチの関係について

個人相談カウンセラーは、グループアプローチに参加した子どもたちの気持ちを活動後に受けとめるかかわりもしていた。グループに参加経験の少ない子どもたちにとって、カウンセラーに気持ち(不安・緊張・とまどい・つらさ)を受けとめてもらい、一緒にグループ活動の振り返りをし、グループに参加する意味を確認し合うことは、安定して活動を続ける上で意味があった。

また、担当者が個人相談カウンセラーと子どもたちについて話し合えたことによって、子どもたちをグループの中だけでなく、多面的に捉えることができた。

さらに、担当者が個人相談カウンセラーと共に活動の振り返りをしたことは、担当者のグループや子どもたちに対するかかわりを考えて行く上で有効であった。



3. 参加した子どもの様子について

平成8年度Ⅰ期から平成9年度Ⅲ期までに10名の小・中学生がグループアプローチに参加した。10名の中には適応指導教室へ通級し高校へ進学したもの、個人相談・グループアプローチから高校へ進学したもの、また転校し登校しているものなどがある。反面、家に閉じこもっているものもいる。ここで、参加した10名の中で平成8年度Ⅰ期～Ⅱ期に参加したC男について、彼をどうとらえ、グループの活動内容や担当者のかかわりをどう考えていったかをまとめてみることにする。

(1) C男のプロフィール

C男（グループアプローチ参加時：中2）

- ・大柄，色白。やや太った感じ。時々，目を細めて見る。服装は，スウェットの上下にジャンパー。夏になると半ズボン。色は白，黒，グレー。髪形はスポーツ刈り。夏休み明けは，髪が伸びてぼさぼさしていた。
- ・担当者に対する言葉使いは丁寧。（「〇〇なんですか。」「〇〇したほうが，いいんじゃないんですか。」等活動の中でも丁寧語を使う。）
- ・将棋・テレビゲームが好き。体を動かすことが嫌い。苦手意識も強い。「不器用（C男の言葉）」で工作など物作りも苦手。苦手なことや自信のないことには手を出さず，逃げてしまう。

(2) C男の活動記録から

C男について言葉・行動・表現・体の様子などについて活動の中で観察したものを記録カードに記入し，分類し，その中心的な意味を考えてみた。その結果，各期にいくつかの特徴が認められた。これを受けて担当者はC男に対するかかわりを考えていった。

① 第1期（平成8年5月31日～7月12日）担当者がかわり，新しいグループに参加し，新しい人間関係作りが始まったころ。

活動の記録から	中心的意味
活動内容を決めていた時，「やりたいことは，将棋」と答えた。	a 将棋が好きで，自分の腕前に自信を持っている。 b 新しいグループの中で，メンバーに自分を認めてほしい。
プラバンを作りながら「權，雀，船で連想するものは？」と聞いた	
ウノをやりながら，自分の側に将棋を広げた。	
メンバーに回り将棋のルールを教えていた。	
自己紹介のカードを紙を切り抜いて作ったが，時間がかかった。カード作りでやり方をB男が「～やったほうが速く出来るよ。」とアドバイスしたが自分のやり方でやっていた。	c 自己紹介のカード作りでは，他のメンバーが作業を終えてC男を待っているのに気付かない。また，ダーツの時も他のメンバーが矢を投げているのを遮ってルールを説明していた。 自己中心的で，他の人の気持ちに気付かない。
ダーツの箱の裏のルールをメンバーに熱心に説明していた。的と投げ人の距離237cmを60cm物差しで測ったが何回もやり直していた。	
ビリヤードで球をなかなか落とせないが，最後までB男とプレイした。	d B男は同学年。ゲームが好きで，C男よりも何をやっても上手で，将棋以外はB男にはかなわない。
B男とふざけていて，Tシャツを引っ張られ首の所が切れてしまったが，「切れちゃった。」と笑いながら言った。その後，B男と一緒に帰った。	
活動後，ロビーでB男とゲームボーイを1時間半ほどやる。	二人の関係はB男がリードしてC男が従っていく感じだった。 C男は友達を求めている。
6階のボーリング場までB男と一緒に階段を登ろうとした。ボーリングをした後，B男はC男の電話番号を聞いた。	

担当者から見た第1期のC男像

- ・自分の得意な事をメンバーに見せ、自分を認めて欲しい。(a b)
- ・自己中心的で他者のことを考えられず、他者との関係がうまくとれない。(c)
- ・友達を求めている。(d)

担当者のかかわりの意図

☆C男がメンバーに認められる活動を考えていく。

- ・C男にとって一番大切なのは、安心できる居場所作りと考えられた。そこでC男がメンバーに認めれたという充実感が持てるような活動を取り入れる。
- ・得意な将棋をやりたがるC男だが将棋以外のものにも活動を広げるために、活動場所の隅のテーブルにいろいろな材料や本をならべて、見られるようにしておく。

☆グループのメンバーとのかかわりをたくさん経験させていく。

C男は自己中心的な言動が見られ、対人関係に不得意さを感じた。そこで、他のメンバーと協力する活動を多く取り入れて、C男を見守っていくことにした。



その後のC男の様子

- ・C男が得意とする将棋は他のメンバーが苦手な活動としては本将棋に取り組むことはなかなか出来なかった。一方、運動や工作が苦手とっていたC男だが、前に経験したことのあるものやその時に自信が持てたものについては、抵抗が少ないことも分かってきた。
- ・B男とは同学年ということもあり、2回目の活動から一緒に帰る姿を見るようになった。その後、活動後にロビーでゲームボーイを1時間半以上も二人でやっている姿も見られるようになった。会話も楽しく出来るようになってきた。7月のボーリングの帰りにはB男がC男の電話番号を聞いている場面もあった。二人がグループの活動を越えて、親しくなっていく様子が分かった。

A男が適応指導教室に通級するようになり、C男とB男になる。人間関係作りの中で自分が安心

② 第2期 (平成8年9月13日～9月27日) できる居場所を探したり広げたりしていたころ。

活動の記録から	中心的意味
活動内容を決める時に「苦手」と言っていた工作を提案した。(2回、家で作った事があることが後でわかった) 「前あったでしょ。」「本。」(できるかな?)「できるんじゃないの。」	a 自分が作ったことのあるペットボトル作りを提案するが「やりたい」とは表現しない。工作は苦手と言っていたが「ロケット」作りには <u>自信がある</u> 。
材料のペットボトルを2本持ってきた。作り方をメンバーに教えていた。	b 自信のある活動をしているので、 <u>満足</u> そうな表情で作り方を教えたり、自分のロケットを見せている。
打ち上げの日、発射台を家から持ってきた。自分で工夫したパラシュート付きのロケットを持ってきた。	
打ち上げの時には水がかかるからとタオルを持ってきた。水をかぶったメンバーに貸していた。	c 他のメンバーにタオルを貸したり、打ち上げ方をアドバイスするなどの <u>他者</u> を思いやる行動が見えた。
高く飛んでいったロケットを眩しそうに見上げていたが、飛ばすことよりメンバーの飛ばす準備にいろいろアドバイスしていた。	

<p>夏休み中、B男はC男の家に2回遊びに行った。 「C男君の机の上は物がいっぱい置いてあった。あれじゃ、勉強できないよ。」と話す時、頭をかしげ手を頭に置き聞いている。</p>	<p>d 夏休みの間にB男とC男が親しくなっていた。</p>
--	--------------------------------

担当者から見た第2期のC男像

- ・自分の提案通りの活動が成功して、メンバーに認めてもらえた満足感が持てた。(a b)
- ・自分が満足できる場では、他者を思いやる行動が出てきている。(c)
- ・B男と友達になれた。(d)

担当者のかかわりの意図

- ☆C男が自信を持てる活動を広げていく。
 - ・C男は経験のないことに不安を感じて初めから敬遠してしまう事が多い。自信を持たせながら、活動を広げていくことを続ける。
- ☆B男とC男を見守っていく。



その後のC男の様子

- ・A男が適応指導教室に通うようになって、C男とB男の二人になった。第1期の終わりにC男の電話番号を聞いていたB男は、夏休み中にC男の家を2回訪ねていた。休み明けに、その時の様子を二人は楽しげに話していた。しかし、B男の家庭の事情もあって、C男はB男の家を訪ねる事はなかったし、B男の保護者もC男の家にB男が行っていることは分かっていたが、お礼などの連絡を取ることはできなかった。二人の関係はB男がC男をリードしているようであったが、C男もB男が連絡を取ったり、家に訪ねてきたりする事はうれしいようで、グループ活動の中でも楽しそうに話していた。
- ・第1期に隅のテーブルに広げて置いた本をやはりC男は見ている。その中で、以前に父親と作ったことのあるペットボトルロケットを見つけた。さらに休みに妹の友達のペットボトルロケット作りを手伝ったと言うことだった。2回も作って自信が付いたC男は活動内容を決める時に自信をもって提案し、作る時も自信を持って皆をリードしながら作っていた。また、当日は家で作ったというパラシュート付きのロケットを持ってきた。そのロケットの先端には大きなスポンジが付いていたが、それは近くの粗大ごみ置場にあったソファースポンジを取ってきたと愉快そうに話していた。実際に飛ばしてみると、C男の計画通りには飛ばなかったがそのロケットを大事そうに袋にしまっていた。
- この活動の中では、C男はメンバーに思いやりのある姿を見せていた。態度も落ちついていて、いつもの爪を噛みながら何か焦っているような話し方もなかった。しかし、ペットボトルロケット2回の活動の振り返りカードの感想欄には「？」が書いてあった。いつもは必ず一言書いていた。自分が提案して皆と活動したので、皆の反応の方が気になるといったことを表しているとも考えられる。
- ペットボトルロケットの活動は、C男にかなり自信を与えたように思われた。

③ 第3期 (平成8年10月4日～11月1日) 活動の場がかわり、新メンバーも増え、あたたか人間関係が始まったころ。安心して居る居る活動を再開したころ。

活動の記録から	中心的意味
<p>新メンバーが入ってきた。C男は進んで自己紹介した。「C男と言います。物覚えが悪いので名前を忘れてしまうかもしれませんが、よろしく。」と挨拶した。カウンセラーがC男の名前を聞き取れないと言うと何回も言いなおしていた。</p>	<p>a 新しいメンバーに自分を認めて欲しいと張り切っている。</p>

トランプの本を持って来て、新しいゲームをメンバーに親切に教えた。	b 自分なりの活動予定を考えているようで積極的に活動を提案するが、メンバーの事を考えることはない。
「オセロゲームをやろう」と提案し、トーナメント表も自分から作った。	
クレープ作りでは、箱の裏を見て計量カップで材料を計って、作りはじめる。クレープを焼くのも一番初めにやった。	c オセロは得意。クレープ作りは妹がやっていたのを見ていた。どちらもやったことがあるので自信を持って活動する。
新メンバーが来ることを伝えると「一人一芸を考えて来よう。」と提案した。	
活動後、B男と二人で残り、担当者と話をして帰った。	d 新メンバーに気を使っている。しかし、B男との二人の時間も大切にしている。

——— 担当者から見た第3期のC男像 ———

- ・新メンバーに自分を認めてほしい。(a)
- ・グループになれ、積極的には参加していこうという意欲が出てきた。(b c)
- ・自分なりの思いが強く、他のメンバーの思いを考えたり、表情を見たりできない。(a b)
- ・B男との関係は大切にしていきたい。(d)

——— 担当者のかかわりの意図 ———

☆C男の積極的な参加の姿勢は大切にしていく。

- ・第2期で自信を持って活動するようになってきたC男の積極的な参加態度を大切にしていく。

☆他のメンバーの様子に目を向けるようにさせる。

- ・自信を持って満足して活動できているときは、メンバーに対しての思いやりを発揮することができていたC男が自己中心的な活動を繰り返し、他のメンバーにとってそれが迷惑になっているときには、担当者がC男に気付かせるように伝える。



——— その後のC男の様子 ———

- ・C男はこの時期からトランプの本を持って来て、新しいゲームを提案し、皆に教えるといった事が見られるようになってきた。担当者もC男の積極性を大切に、B男とC男にグループのリーダーの役割を期待して活動の計画を立てる場面などでは中心になるようにしていた。C男は、活動の計画作りでははりきって提案していた予め、やりたいことを決めてきているようだった。しかし、提案した活動を他のメンバーはどう思っているかなど考える事はなかった。担当者は他のメンバーに発言するように促したが、「それはいやだ」「それはやりたくない」と言える子はいなかった。
- ・B男はゲームの途中で慣れない新メンバーに気を配り、「まだ、やってない人がいるよ。」など担当者に話しかけていたが、直接、新メンバーに話しかけたり親切にしたりする事はなかった。活動後、B男とC男は二人で残りゲームをしたり話をしたりしてから帰っていった。活動の中で頑張っているが、二人の関係・担当者との関係を大切にしていきたいと感じていたように思えた。
- ・C男の一人一芸の提案にも「いやだ」と言える子はいなかった。担当者が婉曲に伝えてもC男には伝わらず、一人一芸を用意する事が決まった。メンバーには「できなかったらいいんだよ。」と伝えたが、C男の積極性と他のメンバーの気持ちの隔たりの調整が難しい。

④ 第4期 (平成8年11月15日～12月20日) B男がグループを休むようになる。C男が人間関係作りに意欲を見せるころ。

活動の記録から	中心的意味
<p>前回自分が提案したとおり「一人一芸」を用意してきた。自分のゲームに使う紙も用意してきた。</p>	<p>a グループの中心になって活動していきたい。自分のペースで進めたい。 <u>積極的な活動意欲を見せる。</u></p>
<p>次に、回り将棋を始め、C男が初めに上がった。C男はNカウンセラーとトランプの新しいゲームを始めるが、2回程で止め、回り将棋を見に来た。</p>	
<p>紙をテープ状に切り、互い違いに編んで四角い形を作る。まだ回り将棋をやっていた担当者に投げた。担当者がそのままにしておく、C男は自分で拾いに来た。回り将棋が終わって、皆に改めて紙細工を見せ、説明した。</p>	<p>b B男が参加しなくなって、かえって張り切り活動している。しかし、張り切っても他のメンバーの事を考えることができないので<u>グループを仕切りきれない。</u></p>
<p>次にやった手品はハンカチで手首を縛って解かないで抜くといったものだった。手品が終わってから、C男は解説を始めた。</p>	
<p>トランプをやっていると、「やっている間に思いついたゲームがあるんですけど。推理みたいな。」と説明しはじめた。「質問してください。」と言いメンバーの質問を待つが出なかった。</p>	
<p>いつもより遅れてきたC男。「B男が来なかった。少し待っていたけど来ないから、先に行っちゃったと思って来ちゃったんですけど」「電話してみたらどうですか。」「もう、したんですか。」</p>	<p>c やっと友達になれたB男の欠席はC男には大きな痛手となっている。しかし、率直に「どうして来ないんだろう。僕が電話してみよう」とは言わない</p>
<p>頭を下に向け、うなだれて歩いて来た。(外の様子)</p>	
<p>階段を降りる途中に「ところでB男は。」と聞いてきた。一緒にいたD男が「誘わないほうがいいよ。来なくなったら来るんだから」と言うと、黙って聞いていた。</p>	

——— 担当者から見た第4期のC男像 ———

- ・グループの活動を自分なりの計画で進めようとしている。(a)
- ・B男が欠席するようになって、グループの中心になって活動しようとするが仕切りきれない。他のメンバーの事を考えていないのでグループに合っていない活動になっている。(b)
- ・B男が欠席したことは、C男にとって大きな痛手となったが、自分からは連絡をしようとししない。(c)

——— 担当者のかかわりの意図 ———

B男の欠席で張り切る姿も見えたが、無理をしている様子も見える。グループの中心になって活動したいのだがうまく行かない。これはC男が他者との関係がうまく結べないところに関係がありそうに思える。C男の家庭での様子を聞いても「仲のよい2～3人の友達とゲーム等で遊ぶことが多かった。人に評価されるのを嫌う」ということがあった。

グループの活動の中でC男に対して、次のようなかかわりを考えた。

☆C男の活動意欲は大切にしていく。

☆グループの活動内容を無理のないように広げ、メンバーがよりかかわりあえるような活動を考えていく。

☆活動の成就感・達成感が味わえるような取り組みを考えていく。



- ・B男が休むようになった事は、C男にとって大きな痛手であった。しかし、一方C男はグループ活動の楽しさも感じられるようになっていた。個人相談でも「これはグループでやろう。」と言った発言も増えていた。
- ・C男の提案はメンバーの事を考えずにされる事が多かった。そこで担当者が「これ、よくわかんないよ」「他のを考えようよ」と発言して見ると、他のメンバーも発言し、C男が気付くといったことがあった。しかし、その後、新しいカードゲームをC男が持ってきたときに、時間がないのに始めたが、途中で「今度やろう。時間がない。」と自分で気付くことができた。
- ・リラックスタイムで、皆が卓球を楽しんでいるのに、C男はやはりやらないで担当者を相手にオセロや将棋をやっていた。C男は「やっぱり、スポーツはサッカーかバスケだよ」と担当者にいった。担当者はこの言葉をC男の活動の内容を広げるチャンスと考え、バスケの時間を設定しグループで活動してみた。初めは、体を強張らせていたが、C男も次第に動きはじめ、振り返りカードに「おもしろかった」と書いていた。C男にとって、スポーツでおもしろかったという感想を書いたのは始めてだった。表情も明るく、声もよく出ていた。

(3) C男の変容とその考察

C男のグループアプローチで見せた変容について各期についてまとめてみると、以下のようになる。

①第1期

外見の様子から見えることは、以下のようなことであった。

担当者に対する言葉使いは丁寧で、やや早口。目を細めて見ることがある。いつも布製の手提げバックに傘・ゲームボーイ・ゲームのストーリーの文庫本を入れて持ってくる。将棋が得意で、体を動かす運動などは苦手意識が強い。爪かみが激しく、爪が小さくなり、まわりの皮も白くふやけていた。

活動の中からは、

- ・自分の得意なことをメンバーに見せ、自分を認めてほしい。
- ・自己中心的で、他者との関係がうまくとれない。
- ・友達が欲しい。というようなC男の姿が見えた。

②第2期

夏休み明けに髪がぼさぼさに伸び、日焼けしていない白い顔で現れた。体は一回り大きくなっていたが、白く柔らかくなった感じがした。この事からも、外出はほとんどなかったのではないかと考えられた。

しかし、第1期では活動内容を決めるときに「～でいい。多分。」というように答えていたC男が「苦手」と言っていた工作の「ペットボトルロケット作り」を提案した。そのロケットの活動を通して、以下のような様子が見えた。

・自分を認められて満足した様子を見せると同時に、水に濡れるのではとタオルを持ってきてメンバーに貸すなど他者を思いやる行動が出てきた。

さらに、夏休み中にB男がC男の家を訪ね、親しさを増していたこともC男がより安定する一因となった。

③第3期

活動場所がかわり、新メンバーを迎え、新たな人間関係作りが始まった。

グループの中で安定してきていたC男は、

- ・自己紹介を自分からしたり、活動に一番初めに取りかかったりと自信を持って活動している様子を見せていた。
- ・積極的に参加していこうとする意欲を見せ、活動についても積極的に提案した。

しかし、提案する活動が新メンバーには難しいものだったり、活動のスピードが速すぎたりと、他のメンバーの事を考えていない言動も見えた。

また、B男とは他のメンバーとの活動後、残って話していくといった二人の関係を大切にしている様子も見えた。

④第4期

B男が休むようになった事はC男にとって大きな痛手となった。グループにやって来るときも「下を向いてうなだれて歩く」様子が見られた。反面、B男が休むことで、よりグループの活動に意欲的に参加し、グループのリーダーシップをとろうとする様子も見られた。

- ・グループの活動を自分なりに計画している。
- ・グループの中心になって活動している。
- ・他のメンバーの様子を見て、自分の行動を考えられる。といった様子も見えた。

また、初めて外でバスケットボールをやり、初めはぎこちない動きだったが、次第に大声を出してプレイするようになった。活動後の振り返りカードでも「おもしろかった」という感想が書いてあった。

この頃、外見的な変化の様子としては、「爪かみがほとんどなくなった・布製のバックを持ってこなくなった」といったことがあげられる。

また、将棋以外のやりたいこともいえるようになり、他のメンバーとの活動を楽しむ様子もあった。

グループの中で安心して活動できる経験を積んだことから自分を認められた満足感が持て、他者を考えるゆとりが持てるようになったように感じられた。

この時期にインテーク以来欠かさず通っていた個人相談を2回続けて休んだことがあった。そして「もう個人相談でやることがなくなった」とのことであった。C男の中で何が起こっていたのだろうか。

4. 担当者の変容について

(1) 担当者の心や態度の変化の様子について、以下のような5期に分けることができた。

① 不安・緊張期

- ・グループの中に人間関係が出来ていない頃。初めての子どもたちを前に緊張しながら活動していた。担当者の本当の気持ちを伝えられず、どこか無理をしていた。
- ・担当者は子どもたちの事を考えているつもりでいたが、担当者自身がどう振る舞えばよいかということに心を奪われていた。

② 疑問期

- ・子どもたちにもグループにもなれてきた頃。子どもたちの問題点を探すことが多くなった。そして、学校に復帰させるには、何が必要かという話し合いが振り返りの中で繰り返し行われた。
- ・担当者同士も意志の疎通がはかれるようになり、徐々に子どもたちを見ることが出来るようになってきた。

③ 自信期

- ・活動が順調に進んだ頃。担当者が活動に自信を持って、活動を進められるようになってきた。担当者の子どもへの期待感が強く出て、指示的な言葉や態度、評価的な言葉かけも見られるようになった。

④ 反省期

- ・活動に不安が出、活動を振り返る頃。グループアプローチで出来ることは何だろうかと思いなおし、子どもたちにとってのグループアプローチの意味を考え直した。その結果、子どもたちの様子を見ながら活動を柔軟に変更できるようになってきた。

⑤ 安心期

- ・子どもたちを信頼していこう。自分たちを信頼していこうと思い出した頃。子どもたちとの会話を楽しみ、活動を楽しむようになった。無理をせず、自然な感じで自分の気持ちを伝えられるようになった。

以上の担当者の心や態度の変化は、子どもたちの変容やグループの変容と密接なかかわりがあり、相互に関係し合っていた。

(2) 担当者の変容に及ぼす要因

担当者の変容に及ぼす要因としては、いくつか考えられるが、中でも個人相談担当のカウンセラーとのかかわりが大きかった。実際には、

- ・個人相談カウンセラーの子どもたちへのかかわり方を学んだこと。
 - ・担当者のかかわりへのアドバイスをもらったこと。
 - ・活動の振り返りの中でグループの動き・子どもの変容についての意見交流をしたこと。
- といったことがあげられた。

また、要因の一つとして、子どもたちの変容も上げられる。

担当者の変容

担当者の変容

不安・
緊張

- ・子どもたちは来てくれるだろうか。
- ・子どもたちとどんな話をしたらいいのだろうか。
- ・ひたすら子どもたちを受けとめなければ。
- ・楽しい活動をつなげていくことを中心に考えよう。
- ・他の担当者はどうして気楽に話せるのだろうか。
- ・活動が終わると、心身が大変疲れていることに気付く

グループの中に人間関係が出来ていないので、担当者の間でも緊張している。初めての子どもたちを前に緊張しながら話題を探す。担当者の本当の気持ちを伝えられないで、どこか無理をして子どもたちに接している。



疑問

- ・この子たちは、普通じゃないか。
- ・この子たちは、どうして学校に行けないんだろう。
- ・この子たちを学校に再び行かせるには、どうしたらいいだろう。
- ・学校に行かせるために活動はどうあるべきだろう。担当者は何をすべきだろう。

子どもたちにも、グループの活動にもなれてきたころ。子どもたちを学校に戻すにはとといったことが話題として多くなる。また、子どもたちの中に問題を探し、不登校の原因を考えるような振り返りが多い。



自信

- ・活動は順調だ。子どもたちも楽しんで活動している。
- ・「座りなさい」「作ったものを交換しましょう」
- ・「○さんは、もう大丈夫。」
- 「□さんは、～したがついてる」
- ・「△さんは、いい子だね」
- 「○さんは、えらいね」

活動が順調に進み、担当者が自信を持ってきた。新メンバーも入り、担当者が中心になって活動計画をたて予定通り実行していくといった活動が多かった。指示的な言葉や態度が多く見られた。また、評価的な言葉がけも見られる。



反省

- ・グループアプローチは何のためにあるのか。
- ・担当者のグループアプローチでの役割はなんだろう
- ・子どもたちは、グループアプローチに何を求めているのか
- ・学校に復帰するとかしないとかを決断するのは、子どもたち自身。グループアプローチは子どもたちが元気になってくれる場を提供するだけ。
- ・子どもたちの気持ちを待つような活動をしよう。

グループの活動はこれでよいのかと今までの活動を見直した。そして、グループアプローチの原点についての話し合いも繰り返された。子どもの気持ちを待つ。担当者の考えを押しつけない。子どもを中心に考えて活動計画に柔軟性を持たせることを再確認する。



安心

- ・今一番、この子にとって大切なことは何か考えよう
- ・○君のサイン（意地悪）→受けとめる→意味を考える
- 担当者のサインを返す（積極的にかかわる）
- ・子どもたちと気持ちが通じた感じがする
- ・子どもたちと活動していて楽しい。一緒に会話を楽しむことが出来る
- ・自然な感じで自分の気持ちを子どもたちに伝えられる

反省を活かした活動を続ける中で、子どもたちをより細かく見ていこうとする姿勢が振り返りの話し合いの中でも出てくるようになった。子どもたちへの信頼と共に担当者間また自分自身への信頼が生まれてきた感じがする。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

本研究会議では、登校拒否（不登校）児に対するグループアプローチを進めながら、その活動の中で子どもたちが表出している表情・態度・言葉・仕種などから、その中心的意味をとらえ、「各期の子ども像（仮説）」を考えていく。そして、その子ども像から、さらに担当者としてのかかわりを考え、実施し、その結果としての子どもの様子を活動の中で表出している表情・態度・言葉・仕種などでとらえ、中心的な意味を考えていくといった研究の進め方をとった。

このように、子どもの変容を大きく変わったと思われる幾つかのまとまりにして、その子の見せている様子からその意味を考えた事により、より子ども個人を見つめる事ができた。また、その仮説にもとづきかかわりを考えたことから、より適切であると思われる方法を取ることが出来たように思われる。

また、担当者の変容を振り返り、変容の段階を考えたことで、自分自身への振り返りが深まり、担当者として貴重な研修ができた。

さらに子どもの変容と担当者の変容を考えていくと、両者は密接に関係し合っていることに気づいたが、必ずしも両者の変容が時間的に一致して起こっているということではないということが分かった。

グループアプローチに参加したばかりの不安定なときに子どもの不安や戸惑い・緊張などを受けとめてくれるカウンセラーの存在は子どもたちの大きな支えとなっていた。

また、担当者とカウンセラーが情報交換をしたり、活動の振り返りを一緒にしたりするという連携ができたことによって、子どもの状態をより多面的にとらえることができ、活動の中でのかかわりもより細かく考えることができたように思われ、担当者自身の振り返りも深まりが得られた。

2. 今後の課題

(1) 子ども集団の構造について

個人の変容を考える事とともに、子ども集団の変容や集団が個人にどう働きかけたか、また個人が集団にどんな働きかけをして、集団の構造がどう変容したかなどを探ることもグループアプローチとしての一つの課題であると考えられる。

(2) 担当者について

担当者は主任研修員1名・研修員3名という編成だが回によっては担当者が1名ということもあった。子どもたちへのかかわりや振り返りを考えると、どの回も複数

で担当できるような体制作りが望ましいと考えられる。

(3) グループについて

オープングループで活動してきたが、途中で参加者を迎えたときに、新しい参加者と継続参加者にどうかかわっていくかが難しい。人数的な問題もあるが、各期ごとのクローズドグループも考えていきたい。

おわりに

この64回の活動を振り返って、大切なことに気付かせてくれたのは、いつも子どもたちだったことに改めて気付いた。とくに担当者自身の変容をたどって行くなかで、かかわりのまずさに改めて気付き、それをカバーしてくれた子どもたちの温かさに気付いた。

最後になりましたが、ご指導いただきました永井先生はじめ諸先生方、活動を支えてくださった相談室のカウンセラーの皆さん、そして参加してくれた子どもたちとその家族の皆さんに心から感謝を申し上げます。

(参考文献)

真田昭他「登校拒否に対する治療の構造的展開」

筑波大学学校教育部教育相談研究分野

教育相談研究集19集 1981

田中熊次郎「グループセラピー」

日本文化科学社 1987

小泉英二他「登校拒否 その心理と治療」

学事出版 1988

高野清純「プレイセラピー」

日本文化科学社 1988

国分康孝編「構成的グループ・エンカウンター」

誠信書房 1992

安谷屋健・鈴木眞一・押切健・西川勇・塚原俊雄

「登校拒否（不登校）児に対する

グループアプローチに関する研究」

川崎市総合教育センター研究紀要

1988・1989・1992・1994・1996

(指導助言者)

横浜国立大学教授

藤岡 完治

(川崎市総合教育センター専門員)

東京都立大学助教授

永井 徹

川崎市立小学校児童指導研究会長

本間 千尋

(川崎市立下河原小学校長)

川崎市立田島養護学校長

木村 巖

川崎市立菅小学校教諭

塚原 俊雄

グループアプローチ参加状況

平成8年度 平成9年度

グループアプローチ参加状況 (No. 2)

No.	平成9年度													
	期	月	日	回	A男	B男	C男	E子	D男	F子	G男	H男	I子	J子
30	4/	11	1						H 9 4月 高校進学	●	○	○		
31	4/	18	2						H 9 4月 高校進学	○	○	○		
32	4/	25	3							★	○	●		
33	5/	2	4							4月末に転校 登校				
34	5/	9	5							4月末に転校 登校				
35	5/	16	6							4月末に転校 登校				
36	5/	23	7							4月末に転校 登校				
37	5/	30	8							4月末に転校 登校				
38	6/	8	9							4月末に転校 登校				
39	6/	13	10							4月末に転校 登校				
40	6/	27	11							4月末に転校 登校				
41	7/	4	12							4月末に転校 登校				
42	7/	18	13							4月末に転校 登校				
43	9/	5	1							4月末に転校 登校				
44	9/	12	2							4月末に転校 登校				
45	9/	19	3							4月末に転校 登校				
46	10/	3	4							4月末に転校 登校				
47	10/	17	5							4月末に転校 登校				
48	10/	24	6							4月末に転校 登校				
49	10/	31	7							4月末に転校 登校				
50	11/	14	8							4月末に転校 登校				
51	11/	28	9							4月末に転校 登校				
52	12/	5	10							4月末に転校 登校				
53	12/	12	11							4月末に転校 登校				
54	12/	19	12							4月末に転校 登校				
55	1/	9	1							4月末に転校 登校				
56	1/	16	2							4月末に転校 登校				
57	1/	23	3							4月末に転校 登校				
58	1/	30	4							4月末に転校 登校				
59	2/	6	5							4月末に転校 登校				
60	2/	13	6							4月末に転校 登校				
61	2/	20	7							4月末に転校 登校				
62	2/	27	8							4月末に転校 登校				
63	3/	6	9							4月末に転校 登校				
64	3/	13	10							4月末に転校 登校				

グループアプローチ参加状況 (No. 1)

No.	平成8年度													
	期	月	日	回	A男	B男	C男	E子	D男	F子	G男	H男	I子	J子
1	5/	31	1		○	○	○							
2	6/	7	2		○	○	○							
3	6/	14	3		○	○	○							
4	6/	21	4		●	○	○							
5	7/	5	5		●	○	○							
6	7/	12	6		○	○	○							
7	9/	13	7		☆	○	○							
8	9/	20	8			○	○							
9	9/	27	9			○	○							
10	10/	4	1			○	○	○	●					
11	10/	11	2			○	○	○	●					
12	10/	18	3			○	○	○	○	○				
13	10/	25	4			○	○	○	○	○	○			
14	11/	1	5			○	○	○	○	○	○			
15	11/	15	6			○	○	○	○	○	○			
16	11/	22	7			○	○	○	○	○	○			
17	11/	29	8			○	○	○	○	○	○			
18	12/	6	9			○	○	○	○	○	○			
19	12/	13	10			○	○	○	○	○	○			
20	12/	20	11			○	○	○	○	○	○			
21	1/	10	1			○	○	○	○	○	○			
22	1/	17	2			○	○	○	○	○	○			
23	1/	24	3			○	○	○	○	○	○			
24	1/	31	4			○	○	○	○	○	○			
25	2/	7	5			○	○	○	○	○	○			
26	2/	21	6			○	○	○	○	○	○			
27	2/	28	7			○	○	○	○	○	○			
28	3/	14	8			○	○	○	○	○	○			
29	3/	21	9			○	○	○	○	○	○			
					初回参加									H 9年度より参加
					参加									H 9年度より参加
					不参加									H 9年度より参加
					適応指導教室									H 10年度より参加 H 10年 4月 私立中学校 進学
					9月より適応指導教室									H 10年 4月 高校進学
					11月15日より不参加 家に閉じこもる									
					1月より不参加 家に閉じこもる									